

特集「『見える化』により拡大するネットワークサービス技術」の編集にあたって

吉野 孝^{†1}

現在、高速・広帯域の移動通信基盤の整備が進み、「いつでも、どこでも、だれとでも」コミュニケーションが可能な環境が整ってきた。そのような環境は、社会の様々な場面の幅広い用途にわたって、仕事やプライベートを問わず、日常的に利用されるようになってきている。従来の電子メール、ブログ、SNSを中心としたコミュニケーションだけではなく、写真や動画、さらには「つぶやき」や個人の「プロフィール」「ゲーム」など、様々なメディアをきっかけとした、多様な形態のコミュニケーションが発生している。

携帯端末や環境に埋め込まれた多様なセンサ情報などのユビキタス技術との融合により、コミュニケーション支援技術には新しい変化が生じつつある。コミュニケーション過程や作業過程、暗黙知、感情、行動、CO₂など、従来見ることができなかった「デキゴト」「情報」「モノ」の「見える化」が可能となり、人の行動に大きな影響を及ぼしている。これらの「見える化」により、会社や組織のコミュニケーションの効率化が図れたり、漠然としか見えなかった社会の傾向が見えたり、問題解決の方法の発見が可能となったりするなど、社会や人に影響を与える新しいサービスが創出されている。「見える化」とは単なる現象や事象の可視化ではなく、ある問題の解決を目指した目的指向の可視化と考えている。本特集では、このような人と人とのコミュニケーションに関わる「見える化」により拡大する、応用システムやネットワークサービスに注目した。

本特集には、ほぼ当初の計画通り、34件の論文が投稿された。第1回目の編集委員会を2010年4月に、第2回目を7月に、第3回目を9月に開催し、慎重な審議の結果、最終的に14件が採録され、採択率は41%となった。第1回目の査読判定において、1件の論文を採録、21件の論文を条件付採録と判定した。第2回目の査読判定において、21件の条件付

採録の論文のうち、13件を採録と判定した。

採録された論文は、グループウェアとネットワークサービスの幅広い応用分野にわたっており、「会議」「知識」「医療」「評価」「SNS」「機密情報」の「見える化」に関する研究などがあつた。本特集では、新規性および有用性の十分に確保された、「見える化」に関する質の高い多くの論文を掲載することができた。残念ながら不採録となった論文の中にも、興味深いテーマのものもあつたが、新規性・有用性において論文としてのレベルが達成されていないもの、実験手法に明らかな誤りがあるもの、既存研究との差異が十分に見いだせないものなどがみられた。特に、第1回目の査読判定において条件付採録と判定されたが、第2回目の査読判定において不採択になった論文には、条件への対応が不十分であるものが多くみられた。本分野において、信頼性のある評価や有用性の実証は容易ではないが、それらの困難をクリアし、再投稿していただくことを強く期待する。

最後に、本特集の編集にあたって、様々な面からご協力いただいた大平雅雄幹事をはじめとする編集委員、査読者の皆様に深く感謝する。

「『見える化』により拡大するネットワークサービス技術」特集号編集委員会

- 編集長
吉野 孝（和歌山大学）
- 幹事
大平雅雄（奈良先端科学技術大学院大学）
- 編集委員（五十音順）
市村 哲（東京工科大学）、井上亮文（東京工科大学）、井上智雄（筑波大学）、
岡田謙一（慶應義塾大学）、緒方広明（徳島大学）、岡本昌之（東芝）、
小川剛史（東京大学）、金井秀明（北陸先端科学技術大学院大学）、
金子 聡（日本アイ・ピー・エム・サービス）、葛岡英明（筑波大学）、
桑 照宣（富士通研究所）、小林 稔（NTT）、斉藤典明（NTT）、
酒井三四郎（静岡大）、重野 寛（慶應義塾大学）、多田昌裕（ATR）、
樫山淳雄（東京学芸大学）、宗森 純（和歌山大学）、山上俊彦（ACCESS）

^{†1} 和歌山大学システム工学部
Faculty of Systems Engineering, Wakayama University